

# 飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻123号 平成26年2月1日発行

「修身教授録」探求(第八十八回)

## 二二三の瑣事

森 信 三

本日は黒板美し。先生すぐに題名を書かれてあと申されるには「諸君ももうだいたい筆記に慣れてきましたか。書きながらでも分かりますか。物事というものは全で一長一短でして、こういう遣り方にも長短があります。そのうちどういう長短があるかという事は、将来の決定に俟つばかりありません。30年も経つうちには自然と分かる時が来るでしょう。私としてはただこうして話すだけで自らそれを決定する資格は無いのです。二、三十年の後これがどの程度に諸君に役に立つかどうか、それを決するのはまさに諸君の掌中にあることです。

### ■エスカレーターの利用について

さて今日は題目に掲げたように「二二三の瑣事」という題で、平素気づいている極些細な事柄を2つ3つ話してみようと思います。それはすでに題目も示しているように、外側から見ると至ってささやかな事であり、イヤ、人によっては滑稽とさえ思われるかも知れないような事柄です。しかし滑稽なくらいな瑣事の中にも、その中に立ち入って考えてみれば、場合によっては人生の根本問題に連なるものがあるのも思えるのです。しかし些細なことを慎むという事は、その人の精神がよほど卓越していないことには出来にくいことであり、それは今諭えて申せば、例えば紙くずぐらいの大きさのものなら5Wの電灯でもわかりますが、うっすらと有るか無きかに置かれた机の上の塵では相当大

きなWの電灯でないと分からぬようなものです。

さて前置きはこれくらいにして、一つの実例について申してみましよう。近頃時々気づく事柄ですが、百貨店や地下鉄などへ行きますと、エスカレーターに乗りながらドカドカと階段を昇る人が少なくないようです。そもそもエスカレーターというものは、階段を歩いて昇らぬ人のために作られたものです。それを普通の階段のようにドカドカと歩いて上られたのでは、第一エスカレーターが堪りません。しかし今私がここでこれを問題にするのは、そういう百貨店や地下鉄会社に対する同情からの話とは全く筋が違うのです。今私どもにとつてそれが問題となるのは、かようなそつつかしいがさつな態度そのものであります。そもそもエスカレーターの階段を三段や四段早く上ってみたとて、それがどれだけ時間の節約になるといえるのでしょうか。だいたいそういう人はその時間をエスカレーターを降りてからどれほど有効に利用しているのでしょうか。私の今日までの経験ではエスカレーターをドカドカ上るような人間に限って、エスカレーターを降りてからはその辺をのろのろしているようであり、四段後からいった私によって、数歩の間に追い抜かれる人はまず皆無と云ってよいほどです。私は多年の経験によってこの事を熟知していきますから、エスカレーターの途中でいくら人が追い抜こうとも一向平気なんです。というのはエ

スカレーターを降りればすぐ私の方が先になつてしまふからです。

■焦るべき時を見定める

しかし諸君はこの話を単にエスカレーターの話だけと聞いてもらつては困ります。私はここに人生そのものの姿を見、そこにそれらの人々の懐きつつある人生観を窺うことができると思ふのです。おそらく諸君も今後20年ないし30年したならば私のこの言葉をより深く同感せられることと思います。とにかく人間というものには、焦っていけない場合には、たとい周囲の者がどんなにじたばた焦つても、ジツとしていなければなりません。なるほど人の焦る時に自分だけがじつとしてゐるといふことは、まるで自分一人が人生そのものから取り残されてゐるような寂しさや不安を感じるものであります。しかし大きい目から見れば、焦るべからざる時にじつとしていたために、生じた遅れというものは、いつかは必ず取り戻せるものであります。いやそれは意外に早いものでさえあります。これ実に天理であり天命であります。現に諸君の中にも、中学を出てから1年間遊んで本校へ入った人もあります。あるいは病氣などで1年遅れた人もあるでしょう。そこでかつての日の自分の同級生が、襟章を異にして1年上級にゐるということとは、諸君としては定めし淋しい事でもあり、また残念な辛い事でもありません。私といえどもその察しのつかない人間ではあります。しかしそこが大切なところ

です。何となればその1年間の遅れというものは、その人の心が次第で将来いくらでも補えるものだからであります。そもそも人間というものは、順調にとんと拍子でいったときには、多くは人生の表面を浅薄に辿り行くに過ぎないものであります。人間自分が順調でありますと、とかく相手の心の察しがつかなくなるものです。というのは、つまりは人間がお目出度くなるということですから。もちろんかく申すことは、人間ただ苦勞しさえすればそれで良いというのではありません。いかに苦勞しても、その人がその苦勞の味わいを噛み締めるだけの心の工夫をするでなければ、苦勞が却つてその人をひがませます。いわゆる心のひがむものはこれを喪い、心喜ぶものはこれを得るのであります。

■目先の利に迷わない

次にもう一つ申してみれば、諸君が郊外電車の出口などで、出札口がいくつに分かれてゐるような場合、最初になるべく人の少ない列に加わるのは、何ら差し支えないばかりか当然すぎる当然事であります。もしこれをしない人間があったとしたら、それはよほどのマヌケか然らずんばよほどの大物か、いづれにしても桁外れの人間でしょう。(一同大笑いする)そこでまず普通の人間なら、最初はなるべく人の少ないところを選んで出ようとする。ところがしばらくすると、遅いと思つたら隣の列の方がかえつて早くなりそうになつてきたという場合、その隣の

列へ途中から入り込もうとする人をチヨイチヨイ見受けますが、そういう人間は、よし才子ではあるとしても真の頼りにはなりかねる人物であります。そもそも人間というものはいったんこうと決めた以上は、たとひ途中で少しぐらい不利な出来事が起ころうとも、それによつて自分の態度をぐらつかせるようなことでは、真に大成する人物ではありません。また事実においても、早そうに思つて隣の列へ移つてみたところ、その中にまた誰かごついたりして、結局最初の列にいた方が早かつたというような場合が少なくないものです。仮にまた改札口だけは二三歩早く出てみたところで、そういう人間に限つていちど改札口を出ると案外のろろしているものであります。そこでたちまち追い越されること先のエスカレーターの場合と同様です。かように人間といふものは眼前の打算によつて自分の根本態度をぐらつかせるようなことでは、決して大事を為し難いものであります。かくして我々は単なる目先の利欲によつて動かされぬ精神こそ、やがてその人物をして偉大ならしめる根本原因であることとを知らねばなりません。このように考えてきますと、私も自分が自己を磨く機会といふものは、日常生活のあらゆる場合にあることがわかりました。古人は「道は近きにあり」と言つていますが、古人の言葉に我をあざむかざるを知るのであります。

■人間らしい振る舞いを

かような事柄をいちいち挙げては、實際がありませんが、ついでですからもう一つ二つ申してみましよう。よく町の四ツ辻の角に、電柱やポストなどのある場合、町の角とそれらとの間を身を横にしてでもすり抜けて通ろうとするケチな人間が少なくありません。つまり一足でも余分の道は歩くまいとするのです。そしてそのためにはいかに醜い格好をしようとして一切気にしないという態度ですが、これまた決して大成しない人間です。「武士は食わねど高楊枝」。お尋ねしますが諸君はこのことわざの意味を知っていますか(生徒を指して答えさせる)これはつまり武士というものは、たとひ一食や二食喰わずとも平然として、ひもじいなどと言わぬさぶりさえ見せる気位がなくてはならぬという意味でしょう。ついでですが諺というものは分かってはいるつもりですが、案外その意味の分からぬものが多いものです。うっかりすると諸君でも「いろはがるた」の中にもその意味のよく分からぬのがあるかもしれません。そんなことだと恥をかきますよ。そういうものは「俚諺辞典」というものがありますからついでに節調べておきなさい。

さてもとへ戻って武士というものは、そうした心の張りというものがあつたものです。しかるにわずかの功利打算のために、醜いこと卑しいことをしても恬として恥ないというようでは、これまた決して大成する人間ではありません。それについて思い出される一つの面白い話があります。それは諸君もご承知のあの「松

蔭全集」の編集委員の一人に安藤紀一先生という老学者が入っておられるのですが、この方は道の四ツ辻を曲がるのに、真っ直ぐに道の中心点まで行かれて、それから直角に曲られるので、後から行く人はいよいよ先生が曲がれるまでは、どっちへ行かれるか見当がつかなくなつたという事です。この話はちよつと聞くと実に滑稽なようでもあります。しかし私はこの話を伺つたとき、それでこそ生涯中学の一教師をしていられながらよく「松蔭全集」の編集というような歴史的偉業の一大動力足り得たのだと深い感動に打たれたことでした。電柱やポストと街角との間を、イタチやドブ鼠みたいな格好をして、こそこそともぐるようにすり抜けてあえて恥ないような人間では、到底大人物になれようはずはありません。

最後に神社の境内で道に敷石などある場合には、真っ直ぐにその上を歩むべきもので決して斜めにつき切るものではないりません。ことに箒の目が綺麗に立っている庭などを、平気で斜めに足跡をつけて歩くような程度の人間では、これまた決して真の人物にはなれないでしょう。なおついでですが、神社の参拝にあたりては必ず手洗い水を使うこと。またなるべくお賽銭を上げることが忘れないように……。お賽銭というものはあるいは神社の維持費となりあるいは国庫に収まるものですが、そういうことは別にしても、ただ頭だけ下げればそれで済んだと思っただけでは足りません。これらの事柄はどうか他日諸君の教える生徒の人たち

にもよく教えておいてもらいたいと思いません。

安藤先生という方は、お偉かつたようですね。1中学の先生でありながら「松蔭全集」の編集は初めの方が中心だつたようです。それを玖村君が助け、先生の没後は玖村君(玖村敏雄氏のこと。森信三先生とは広島高師時代の同窓生)が中心となつて働いたようです。安藤先生にはもう一つ面白い話があります。それは先生は年中コウモリ傘を持っておられたようですが、しかもかつてそれを地に突かれたということがない。いつも洋傘の先を地面から二、三寸距離を置いて提げておられたということです。何でもないことのようにですが、私はこの話一つを聞いても先生の並々ならぬお人柄がうかがえると思つた。もつともお家は歴とした藤樹先生の御門人のお家柄ではありましたが……。この方ももうお亡くなりになりましたが、私はあの朴实至誠の小川先生のお姿を思い浮かべると、今でも涙が滲んでまいります。諸君、偉人の全集などは大学の先生が作るものだと考えていたら大間違いです。私は本当にこのことを諸君にわかかってもらいたいと思つた。ただいまも申したように「藤樹先生全集」にしても「松蔭全集」にしても、共に一生小学や中学の先生をした方々の至誠真心が中心となつて作られたものです。諸君しっかりしなさいといけません。それには何よりもまず本当の「志」を立てる事ですね。(小林雅敏記) (修身教授録第三巻) 昭和18年9月発行同志同行社)

# 「民族としてのバックボーンを」 (微言)

森信三

○今日国民教育の上で何が一番重大かと問われたとしたら、それは民族としてのバックボーンを打ち立てることだと答えるであろう。○では民族としてのバックボーンは一体どうしたら立つか。答えは明白である。いわく「対米批判の眼を開らき、内的抵抗の小石をつむことである」

○こう言うと、すぐに親ソ親中共論者でもあるかに誤解される向きもあるかと思われるのでついでに言うが、今後日本の進むべき道は、私は態度的には自由を基調とするという意味では、米英6、ソ連中共4くらいの比率がよく、客観的な面では、逆にソ連中共に学ぶべきもの6、米英に学ぶべきものに4くらいと考えている者である。

○では何故、今日、国民教育における最重要事を、民族的バックボーンの確立にあるというに、現状のままていくと、次の時代を背負う第二の国民が半植民地的住民となりゆき、しかもそれを少しも怪しまなくなる可能性が多分にあるからである。

○今日人々のうちには「対米批判」と言うと、それだけでももう親ソ親中共一辺倒な人間と考える人もあるようである。だが現在のわが国にとって、この種の人間ほど危険な人間はないといつてよからう。

○何故対米批判をやかましく言うか。それは繰り返して言うように、現在われわれが圧えられている当の相手がアメリカだからである。だからもし現在われわれを圧えているのがソ連中共であったら、われわれはソ連中共

批判を怠ってはならぬわけである。

○とくに東海の孤島に住してきた我々日本人は、まことにオメデタイ国民でアメリカといえばすぐにシンセツなオジサンやニイサンぐらいに考えやすい。そうした考え方が国民全体に、特に小国民の頭に染み込んだとしたら民族の将来は一体どうなるというのであろうか。

○最近の新聞紙は、米国南部諸州において日貨排斥が行われたことを報じている。すなわち日本の繊維製品を排斥せんがために、それらの品を売る店は、それを明示するような標語を店頭に掲げることによよというのである。

○しかもそれが州の法律によって制定せられつつあるというに至っては、我ら20世紀の今日、しかも世界における最文明国におけるこれが事実と思えるであろうか。日本国民ももうこの辺で、少し眼を醒まさぬといけないと思う。さすがの新聞紙も本気になって取り上げ出した。

○特に国民教育者が、これらの点に関してはずきりとした「批判の眼」を開く必要があると思う。そして適性なる批判の芽を、小国民にもひらかす必要があるであろう。

○今日のような激流にも比せるべき時代にあつては、単に基礎教科を一通り忠実に教えるということだけでは、国民教育者の任務としては十分とは言えない。

○もちろん基礎教科の実力養成の重要さを力説する点では、私は断じて人後に落ちる者ではない。だが単にそれだけでは済まされない時代だということも知らねばならぬ。全身を貫く一本のたくましい民族としてのバックボ

ーンを打ち立てる事……これを忘れては何をどんなに巧みに教えて見ても結局は「仏作って魂入れず」ということになるであろう。(「実践人」昭和31年5月5日発行 第2号)

あとがきに替えて

森信三先生の危惧が的中し、自国の国防をまともにも考えられない「半植民地的人間」が多い。平和ボケももういいかげんにしないと今に中国は日本の無人島に上陸する筈に出るだろう。その備えは自衛隊にはあろうが、国民の中に応分の気概が育っているとはいえない。(30日一繁)

## 第129回「かよう会」のご案内

日時 平成26年2月21日(火)

18時30分～(毎月第三火曜日原則)

場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』

「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)  
06-6531-3686

交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車  
2番出口へ、歩30秒  
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」  
心齋橋駅及び「クリスタル長堀」との  
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)  
2300円 (大きな書店で購入)

2/18良寛戒語  
3/18質問  
4/15忍耐

参加費 1000円

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-1-538189  
電話0744-4513422

Email:hj3@ken.jp  
http://web1.ken.jp/syushin